

興福寺中金堂発掘調査 現地説明会資料

興福寺境内第1期整備事業にともなう発掘調査（平城第325次調査）

2001.6.17

法相宗大本山 興福寺
奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

Iはじめに

興福寺では、興福寺境内整備構想を策定し、現在その第1期境内整備事業を進めている。この整備事業に伴い、98年度に中門・99年度に回廊北東隅・中金堂前庭部・東僧房南西部の調査を行なった。2000・2001年度は3回目として中金堂基壇を中心とする東西51m、南北36m、面積1836m²の調査区を設定した。本年1月から6月末までの予定で、現在も調査中である。

本調査の目的は、主に以下の3点である。

- 1 中金堂創建期の様相を明らかにし、整備事業に資すること
- 2 中金堂創建期から現在に至る遺構の変遷や特徴を捉えること
- 3 明治時代に出土した鎮壇具の出土位置を確定すること

II 中金堂略史

『興福寺流記』によると、藤原鎌足が病に伏した時、妻の鏡女王がその平癒を願い建立した山智寺が興福寺の始まりである。後に飛鳥に造り竜坂寺とよばれ、平城遷都に伴い藤原不比等によって現在の地に移され興福寺と改称された。その時に建てられたのが中金堂であり、遅くとも養老5（721年）には完成していた。その後北円堂・東金堂・五重塔・西金堂が聖武天皇や光明子らの発願によって建立され、壮大な伽藍が造り上げられた。

中金堂は、『興福寺流記』によれば、奈良時代には東西約37m、南北約24mの巨大な建物であった（資料3）。応永6（1399）年再建の中金堂は、現存する図面によると高さ30mを越えると推定される（資料4）。ちなみに応永22（1415）年に造営された現東金堂は、南北約24m、東西約13m、高さ約15mである。

この中金堂は7度焼失したが、そのたびに再建を繰り返してきた。例えば最初の火災である永承元（1046）年の火災の際には、平等院で知られる藤原頼通と定朝によって盛大な再建がなされている。なお、江戸時代に当初の中金堂の廂部分までの大きさで建てられていた仮金堂（通称赤堂）は、昨年解体された。

III 既往の調査成果

先にも述べたように、98・99年度に調査が行われ、多くの成果をあげている。その詳細については、それぞれの調査概報に譲るが、今回の調査と関わる点について整理をしておきたい。

1 伽藍敷地造成

中門東半では谷を埋めた整地土を確認しており、興福寺造営時に大規模な土地造成がなされたことが明らかになっている。これに対し、中門西半今北面回廊では、そうした整地土ではなく、もとからあった丘陵を削って整形して基壇とする、地山削りだしの工法で造られていることを確認した。

2 時期変遷

中門の調査では5時期の遺構変遷を確認した。

- A期 B期以前（創建期）
- B期 混灰岩による基壇外装、玉石敷（平安時代）
- C期 玉石敷上に混灰岩切石を敷く（鎌倉時代）
- D期 花崗岩切石を用いた基壇外装（室町時代）
- E期 D期以降（江戸時代）

回廊などの調査でも以上の所見は基本的には変化していないが、B期の玉石敷について創建期にさかのぼる可能性を指摘した。

IV 今回の検出遺構

今回検出した遺構には、中金堂基壇、須弥壇、階段、北面回廊、中金堂基壇外周の雨落溝、石敷の他、中・近世および近代の土坑・暗渠等があるが、現在も調査中であるので主に先述の3つの主目的に沿った、中金堂そのものに関する遺構について述べることにしたい。

1 中金堂基壇

中金堂基壇上には66個の、いずれも火災痕跡をとどめる礎石が現存する。最大長3m（約5m）を越える巨大なものである。これらの礎石や文献・絵画・建築図面等から中金堂の建物は東西5間・南北2間の身舎四面に扉がつき、さらにその外側に裳階がまわるものと考えられている。今回の調査では、これらの礎石がほぼ原位置を保っており創建期にさかのぼり得ると見ているので、建物の平面プランは創建期以来の形態を現在に至るまで引き継いでいると考えられる。

基壇は中門西半等と同じ地山削りだしの工法で造成されていることが明らかになった。発掘調査前の基壇外装は花崗岩切石を用いた東西41m、南北27mの壇正積基壇であったが、それを撤去した下から、ほぼ同位置で混灰岩切石列を数ヶ所で検出した。この切石は地山を掘り込んでえられており、創建期のものと考えられる。以上から、創建時の基壇は混灰岩切石を用いた壇正積基壇で、その規模は現在とほぼ同じであったことがわかった。

その他に、地覆石や、廂部分で小柱穴群を検出している。後者は、明治期に中金堂が役所として利用された時の床東の穴であろう。

2 須弥壇

須弥壇は大きく3時期の変遷を経ていることが想定される。

①期：平面規模は、南面は身舎柱筋背面からはじまり、外装は凝灰岩壇正積であったと推定できる。

身舎南側の礎石上面の加工痕跡・火災痕跡及びそれらと対応する位置にある凝灰岩地覆石がこの時期の遺構である。凝灰岩が地盤に利用されている点を考慮すると、これが創建期の姿である。

②期：平面規模は調査開始前の状況より一回り小さく、外装は石壇となる。須弥壇階段部分で石壇を、南面の數所で石壇の痕跡を確認している。石壇の外装という点から、江戸の再建に関するか。

③期：調査開始前の状況。花崗岩切石を用いた壇正積基壇であった。明治期に中金堂を役所等として利用するために、明治7年に須弥壇は削平された。その際に奈良時代の鎮壇具が発見され、現在東京国立博物館に収められている。その後明治17年に仏堂として再整備する為の工事の際にも、やはり奈良時代の鎮壇具が出土し、興福寺に所蔵されている。調査前の須弥壇はさらにその後の大正時代以降に築成されたものである。

今回明治に削平されたと見られる面で土坑を2ヶ所検出した。中からは近代の遺物と混ざって和同錢等が出土しており、明治期の鎮壇具出土跡の可能性もある。完掘しているが、微細な遺物が多いため、出土遺物の検討を加え慎重に検討していきたい。

3 階段

階段は基壇四面につけられており、南北階段はそれぞれ3時期の変遷を確認している。

イ 南面階段

I期：一間ごとの独立した階段が3基ついた時期。この形態はちょうど薬師寺金堂や興福寺中金堂復元模型のような階段の状況である。I期の遺構として、基壇南面東側階段積土、基壇前面切欠（東石すえつけ用）、地山を掘り込んでえられた凝灰岩切石、II期の階段下層で確認した凝灰岩切石がある。

II期：五間幅の階段の時期。これは中近世の中金堂を描いた絵・図面に見られる（資料5）。II期の遺構は、凝灰岩と玉石で作られた雨落溝、基壇南面中央部階段積土である。

III期：三間幅の階段の時期。明治初年の写真、調査前の状況がこれにあたる。

ロ 北面階段（北面階段は全時期を通じて一間幅である）

I期：一番内側の時期の凝灰岩切石の時期。

II期：外側の凝灰岩切石の時期。玉石の雨落溝がII期の階段に対応している。なお、II期の間に一部凝灰岩から花崗岩へ改造されているが、その時期については検討中である。

III期：現地の地覆石の時期。

ハ 東西階段

それぞれ二間幅で、現状ではII・III期に対応すると見られる改作を確認しているが、大きな変化は確認できていない。今後の調査によってI期に相当する階段の状況が明らかになるものと思われる。

4 北面回廊

金堂の東西で、とりつき部分を確認した。東は二間分、西は一間である。一部には礎石が残り、複数の梁間は1.2尺である。これは、これまでに検出している南面や東西の回廊の様相と一致している。

5 基壇外周の遺構

これまでの調査で検出した建物周囲の玉石敷及び雨落溝を今回の調査でも確認した。

南面：金堂南面の玉石敷が、基壇縁まで達することが判明した。文献史料を再検討した結果、永承の再建（最初の再建）後の供養の際には、この玉石敷が存在していたことが確実となった（資料6）。

回廊以北：幅60cmの玉石の雨落溝外側で、テラス状に約90cm幅で玉石敷がめぐり、そのさらに外側に一段下がって拳大の石が敷かれた状況を確認した。また調査区東北部分で、幅150cmほどの南北方向に走る帯状の玉石敷を検出した。北は調査区外に伸び、南は途中で東に直角に折れて調査区外へと伸びる。この玉石敷にも拳大の石敷が伴う可能性がある。これらテラス状の高まりを持ち、帯状に伸びる玉石敷の性格については現在検討中である。さらに基壇外周の玉石敷上面には、凝灰岩切石を敷いている時期があることを確認した。

V 出土遺物

1 瓦

325次調査では、奈良時代初頭の興福寺創建から近代に至る、各時代の瓦が出土している。しかし、今までのところ、創建期をふくめた奈良時代の瓦の出土量はきわめて少ない。一方、中金堂東側基壇外側の焼土層（土坑）では、平安時代後期・鎌倉時代の瓦が、ある程度まとまって出土している。これは、永承元（1046年）以後合計7回に及ぶ、中金堂の焼失と再建に関連する資料と推定される。

2 土器・陶磁器

中世及び近代のものが大半を占めている。近代のもの以外は、ほとんどが破片である。

3 金属製品・ガラス製品

明治7・8年および17年に発見された金堂創建期の鎮壇具の残片と考えられる和同開珎とガラス玉が、須弥壇の周辺や階段の積み土の中から出土した。鎮壇具とは、寺院の堂塔を建立するときに地を鎮める法要を行い、そのときに地下に埋納された品々のことである。興福寺の中金堂には、銀製の器や銅製の鏡、金の廷鏡をはじめとする多数の品が納められていた。

ガラス玉は、平玉と呼ばれる基石形のもので、濃緑、緑、淡緑、黄緑、黄、黄褐、褐色、濃褐色など様々な色のものが800点余り発見されているが、今回は緑色のものが1点出土した。

このほかに、建物にかかる遺物として銅製の飾金具や紙、風鐸の破片などが出土した。

VIまとめ

本調査の三つの主目的について、ほぼ達成することができたと考えている。

1 創建期の中金堂基壇をほぼ明らかにできた。

イ 基壇規模・・・平面規模はほぼ創建期と同じ

ロ 積石・・・ほぼ現状が創建期と同じ

ハ 階段・・・南面は独立三間

2 中金堂基壇・基壇周囲の遺構変遷を明らかにできた

今回確認できた各遺構の変遷を整理すると、以下のようになる。

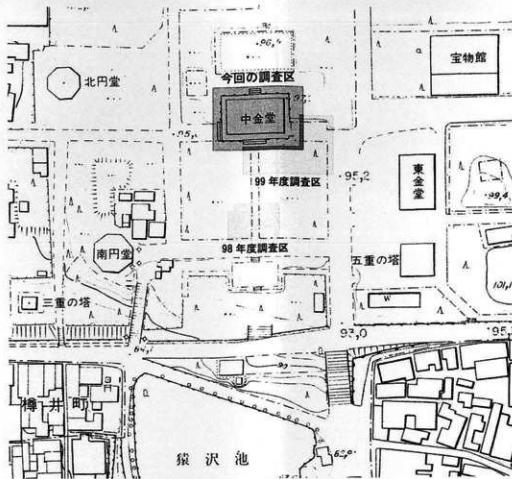
(＊印は、発掘調査では不明だが他の資料から推測されるもの)

	基壇化粧	階段	基壇下	須弥壇
A期・創建期	凝灰岩・埴正積	I		①
B期・平安再建			玉石敷	
C期・鎌倉再建		II	凝灰岩	
D期・室町再建	花崗岩?・埴正積*		白妙・芝生*	②
E期・江戸再建	石垣	III		③
F期・近代	花崗岩・埴正積			

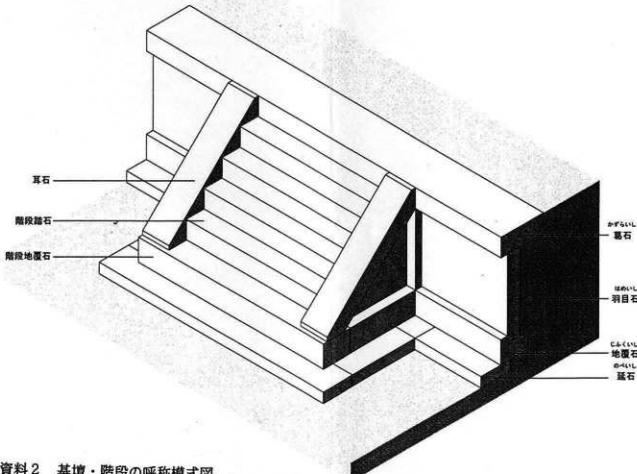
3 須弥壇上で明治における鎮壇具出土跡と見られる土坑を検出した。

ただしこの点については遺物などより詳細な検討が必要である。

建物の平面プラン・基壇規模・南面の独立三間階段等は、まさに平城京の寺院を代表するものであり、藤原氏の氏寺にして京内四大寺の一つである興福寺の面目躍如たるの觀がある。またその後の変遷も、摂関藤原氏の氏寺、大和國の支配者としての興福寺を語って余りあるものと感じられる。



資料1 調査位置図



資料2 基壇・階段の呼称模式図

中金欵院
金堂一字。唐李世民記云。長十二丈四尺。寬七丈。高五尺。
用木梁并高
用金柱。蓋金堂也。周圍
四面皆有金柱五尺。
元明天皇代和銅三秒。廣次淺海公所造立也。

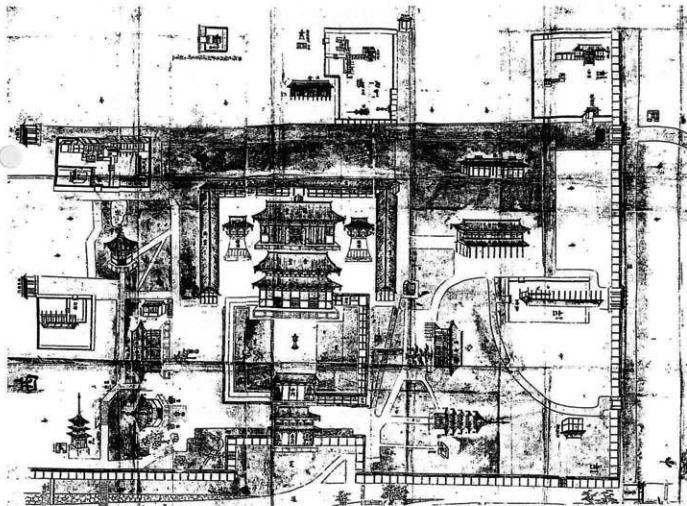


『興福寺流記』より

応永6年再建中金堂実測図（『興福寺建築諸図』より）

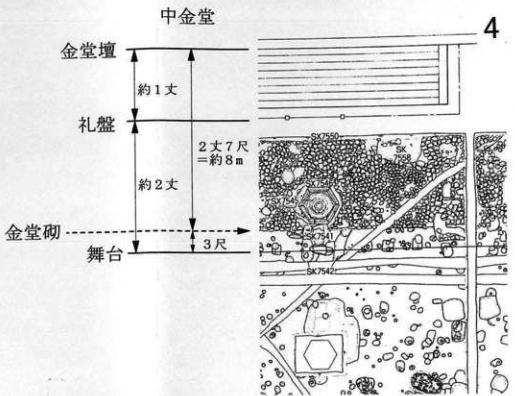
資料3 奈良時代の中金堂

資料4 中金堂実測図



資料5 『興福寺伽藍春日社境内絵図』

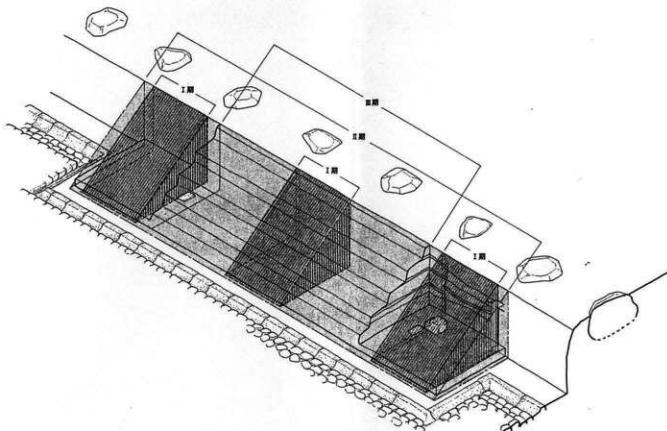
間東西立行供花机六脚。當年在寺中設南庭當，面佈東西間。各立高座。脚^{去地一尺五寸}，當佛而面。立鑿盤。二觀^{許丈}，去鑿盤南二許丈，構立繩木。東西三丈六尺，在二觀之北牆上，各口去鑿盤三尺，於十日其上北端中央立木工事，以待佛也。欲聽法者，內向鑿盤之。



『造興福寺記』より

『造興福寺記』模式図

資料6 中金堂南面玉石敷の見切り



資料7 南面階段麥灑模式圖

第10页

中華書局影印

卷之三

關福寺山金堂

藥師寺

大安寺金堂
14
16
19
20
19
16
14

太安寺

法
隱
寺

法隆寺

11	13	15	16	15	13	11
13						13
13						13
11						

吉招提寺

西山志

關學今書館藏卷之三

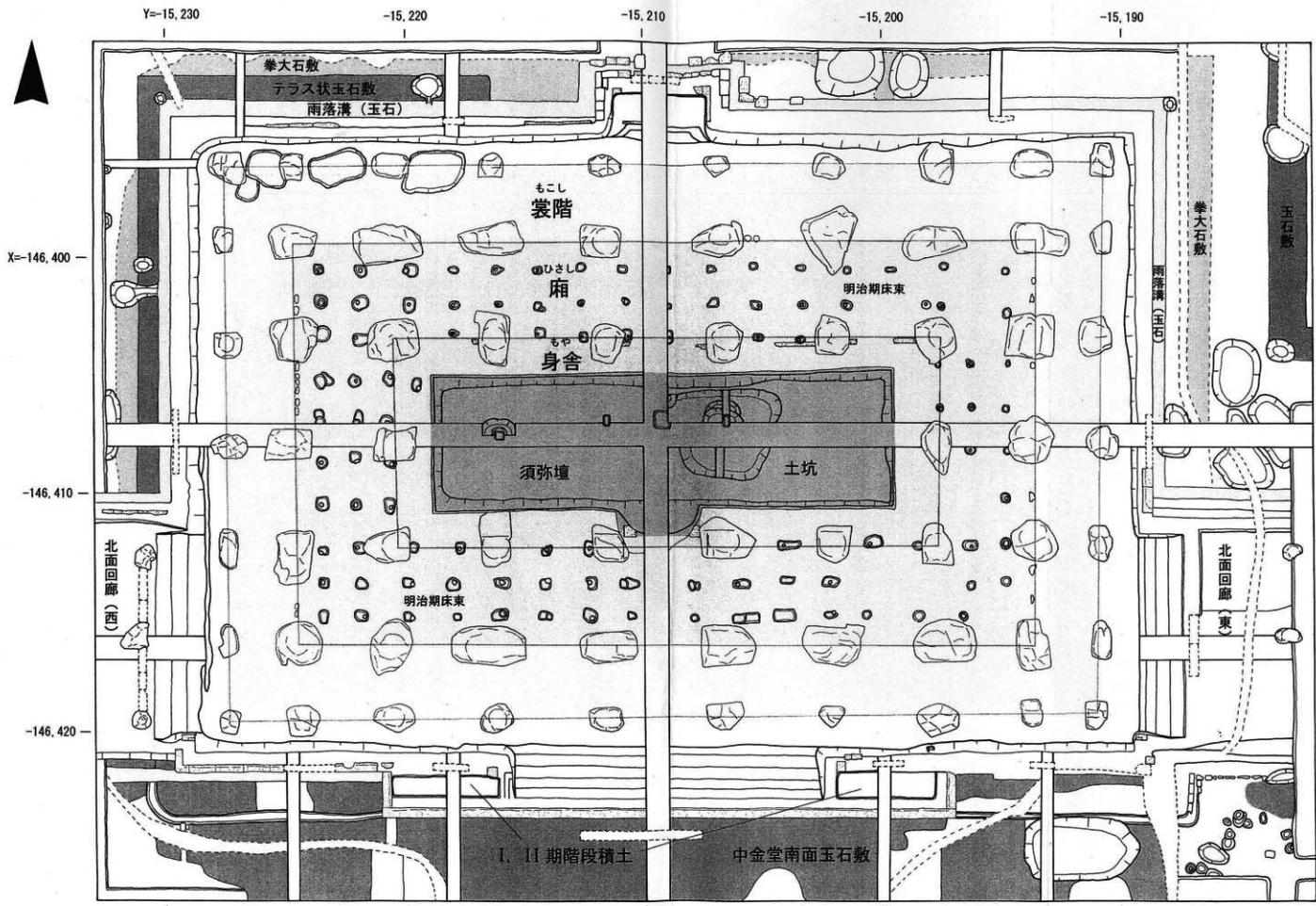
The chart displays the daily count of new COVID-19 cases in China from January 20 to February 14, 2020. The y-axis shows the number of cases (0 to 1100), and the x-axis shows the dates. Black bars represent confirmed cases, while white bars represent suspected cases. Imported cases are indicated by bars with diagonal lines.

Date	Confirmed Cases	Suspected Cases
Jan 20	0	0
Jan 21	0	0
Jan 22	0	0
Jan 23	0	0
Jan 24	0	0
Jan 25	0	0
Jan 26	0	0
Jan 27	0	0
Jan 28	0	0
Jan 29	0	0
Jan 30	0	0
Jan 31	0	0
Feb 1	0	0
Feb 2	0	0
Feb 3	0	0
Feb 4	0	0
Feb 5	0	0
Feb 6	0	0
Feb 7	0	0
Feb 8	0	0
Feb 9	0	0
Feb 10	0	0
Feb 11	0	0
Feb 12	0	0
Feb 13	0	0
Feb 14	0	0

第一次大極限

生後門

参考資料 南都諸大寺および大極殿・朱雀門の規模の比較



発掘調査遺構図 (1 : 150)